※展覧会の名称は変更する場合があります。

2018.5.12 現在

蛇足庵コレクション

江戸のなぞなぞ 判じ絵

平成30年6月9日(土)－8月19日(日)

プレスリリース

細見美術館

蛇足庵コレクション

江戸のなぞなぞ ―判じ絵―

HANJIE ―Pictorial Quizzes in EDO―

平成30年6月9日(土)－8月19日(日)

細見美術館
〒606-8342
京都市左京区岡崎最勝寺町6-3
TEL075-752-5555・FAX075-752-5955
http://www.emuseum.or.jp

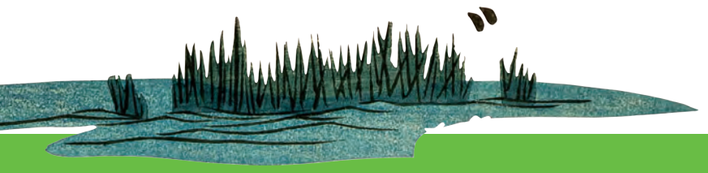
2018.5.12 現在

開催趣旨

〈判じ絵〉とは、「絵」を判じて（解く、推理する）答えを導き出す遊びで、江戸時代に広く庶民に流行した“絵で見るなぞなぞ”です。その内容は、江戸名所や京名所、日本各地の地名、人気役者に力士、動植物に勝手道具、子どもの遊びから人々の欲望、果ては手紙まで、あらゆるものが〈判じ絵〉に取り上げられました。〈判じ絵〉の流行は、当時の人々にとって浮世絵というメディアがいかに身近で手軽な存在だったかを物語るものともいえるでしょう。

本展では、〈判じ絵〉を数多く所蔵する蛇足庵のコレクションより、選りすぐりの作品約100点をご紹介します。当時の浮世絵師たちが趣向を凝らした様々な図柄の組み合わせや、そこから生まれた難問・珍問には、人々の遊び心がたっぷり詰まっています。現代を生きる私たちには馴染みのない難しい問題(答え)もありますが、ユーモアとセンスや機転をフル稼働させて、江戸のなぞなぞをお楽しみください。

勝手道具はんじもの 下　歌川重宣　嘉永四年（一八五一）



かわず
蛙（川、洲に濁点）

判じ絵とは？

絵に置き換えられた言葉を当てるなぞなぞ。

題材として取り上げられたものは、人名や地名、名所、動植物、道具類など実にさまざま。問題の絵は「音」が通じるだけの全く無関係なものが組み合わされているものが中心です。答えありきの絵の構成ですので、人や物が実際にはありえないシチュエーションで描かれた、摩訶不思議な絵がたくさん登場します。

笑いを誘う絵を見る楽しみと、隠された言葉を判じる（解く・推理する）楽しみを同時に味わえる“絵で見るなぞなぞ”は、江戸時代を通じて庶民の娯楽として広く親しまれました。

【答】Q1.ザル(猿に濁点)　Q2.ヤモリ(矢の子守)　Q3.茶釜(茶を点てるガマガエル)

基本情報

入館料：一般 1,300円(1,200円)　学生 1,000円(900円)　※( )内は20名様以上の団体料金
開館時間：午前10時～午後6時（入館は、午後5時30分まで）
休館日：毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)

主催：細見美術館　京都新聞
監修：岩崎均史（静岡市東海道広重美術館館長）
協力：株式会社青幻舎プロモーション
会場：細見美術館　京都市左京区岡崎最勝寺町6-3　TEL 075-752-5555
http://www.emuseum.or.jp

お問合せ先：広報担当　三宅由紀　kouhou@emuseum.or.jp

2018.5.12 現在

主な作品

地名

都名所絵方角かんがゑ（みやこめいしょえほうがく）

時代　刊年不明
版元　和久屋治兵衛

御所を中心に、京都の洛中・洛外、さらにその周辺の地名百カ所が判じ絵になっている。「よみはじめ」を始点として廻り双六のように判じる趣向。

道具

勝手道具はんじもの 下

歌川重宣

時代　嘉永四年（一八五一）一月～十二月
版元　辻屋安兵衛

「勝手道具はんじもの 上」と対となるもの。勝手、つまり台所周りの各種道具、あるいは台所に収納されるものが判じ絵として描かれている。身近という点では、またとない判じ絵の題材であったろう。

虫

新板はんじ物 虫

一猛斎（歌川）芳虎

時代　嘉永二年（一八四九）九月～
　　嘉永三年（一八五〇）九月
版元　伊勢屋忠介

虫を集めた判じ絵。虫の中に蛇やヤモリなどが含まれるのは、今の感覚では理解できない部分かもしれないが、当時は、爬虫類や両生類も虫の仲間と考えられていた。